

山を知る―山に学ぶ

日本山岳ガイド協会 会員 日本山岳会 会員

高^{たか}村^{むら}真^{しん}司^じ

高校1年の時に出会った友人Sに誘われ山岳部の部室を訪ねてから49年山登りを続けてきました。(ほんとは水泳部に入部を考えていたのですが頭を丸刈りにすることに躊躇していた時の事です)この友人Sとの出会いが私の人生を大きく変える出会いでありました。

初めて登った山は山形蔵王・瀧山(1,362m)山頂から眺めた蔵王スキー場や蔵王温泉街の景色に感動し、以降夏の鳥海山では雪渓や千畳ヶ原の雄大な景色のとりこになり、登山の雑誌、山の本を読み漁り、毎週のように蔵王の山へ通い(当時は土曜日午前授業で午後から部室で山の準備を整え山へ出かけました)、夏休みは朝日連峰(高校2年単独登山)、飯豊連峰へと出かけ、高校3年になると同級生は受験勉強のためと一人、二人と山を離れていきましたが他校の友人Uを誘っては残雪の蔵王全山縦走登山、3月の鳥海山をピッケル、アイゼンを使って登ったり、Uとネパール語会話集の冊子などを取り寄せヒマラヤへ行きたいと淡い夢を語り合うようになりました。

気づいたら進路を決める時期になり漠然と「山小屋に就職」「大学山岳部に進む」この二択を考えている時、定期購入していた「山と溪谷」という雑誌に「エベレスト南西壁断

念の日 湯浅道男(日本初のエベレスト登山隊長・愛知学院大学法学部教授)の記事を読み、直ぐに同大を受験、師が教鞭をとる法学部へと進学、同時に山岳部に入部そのことがその後の人生を大きく変えることになるとは夢にも思っていませんでした。

大学山岳部の名門だけありヒマラヤ登山を念頭にした普段トレーニング、毎週の岩登りトレーニング、夏休みは1ヶ月に及ぶ夏山合宿:そのトレーニングは想像を超える内容でしたが19歳の時秋山合宿・南アルプス北岳バットレスを登攀中同級生と先輩が滑落死という大きな出来事に直面、山岳部は2年間休部となりました。

大学4年の時、本格的な雪山登山が1982年日本山岳会学生部遠征隊「ボゴダII峰」(5,445m中国)に初登頂、参加を皮切りに34歳までの12年間海外の高峰登山へと出かけることになりましたが1994年エベレスト登頂前夜高度障害に倒れ九死に一生を得高所登山への夢を断ちました(雪岳山・韓国1984年、ガウリシャンカール峰・ネパール1984年、チョモランマ/サガルマータ三國友好登山隊・1988年、シシヤパンマ・中国1989年、エベレスト・1994年他)。



29歳の時、当時の文部省登山研修所（富山県・現国立登山研修所）の講師として今までとは違う立場で山登りと関わるようになり後の山岳ガイドの基礎のようなことをここで培えることができたと思っています。

39歳の時、登山研修所・北アルプス・大日岳に於いて冬山研修中に大日岳山頂の雪庇大崩落という事故が発生（2000年3月5日）*以下「大日岳事故」、私が引率していた学生2名が亡くなるという山岳遭難事故の当事者として主任講師山本一夫と7年間係争（2007年7月16日遺族と国が和解を受け入れ結審）を経験、この事故を機に登山界の中で登山リーダーの担い手がいなくなるという機運などもあり、その声にこたえる意味でも登山中の責任の所在を明確にできる立場「山岳ガイド」として生きる道を選び2002年10月に（公社）日本山岳ガイド協会に入会、山岳ガイドとして日々お客様と山へ（ヨーロッパアルプス、モンブラン山、東南アジアキナバル山等）、傍らガイド協会のガイド育成、山の事故抑止活動・雪崩事故防止活動などを行ってきました。その縁から日本雪氷学会に入会、防災科学研究所の研究者と雪崩事故現場へ赴き研究者の安全管理を担うことにもなりました（小論文も発表）。

ちょうど事故から13年（13回忌）にあたる2013年5月に毎年のようにオフアールをいただいた国立登山研修所の申し入れを受け春山研修講師として、翌年3月には冬山研修講師、その後主任講師も務めさせていただくことにもなりました。大日岳の事故を機に親身になって寄り添っていただいた仲間もいればネット上で多くの誹謗中傷を浴びたのも事実です。

2011年3月11日 東日本大震災が発生 所属している(公社) 日本山岳ガイド協会がHUMA(災害人道医療支援会)という災害医療チームのロジスティクスを担うことになり、先遣隊として3月19日から宮城県南三陸町に於いて約2か月支援活動に携わることになり「ガイドの多様性」を意識しその後のライフワークにもなりました。その時の体験を災害看護学会で発表する機会などいただきました(「寄り添い支える」菅野 武著(志津川病院医師)にも紹介)。2011年11月HUMAに入会、日本山岳ガイド協会とのコラボで2012年と2017年東日本大震災被災者支援、岩手県大槌町児童自然体験活動支援事業を主管、2012年12月フィリピン台風ボーフア被災者支援先遣隊ロジスティクス会員として参加、2024年1月能登半島地震被災者支援(HUMAと日本山岳ガイド協会共催)に参加と目まぐるしい日々を送ってきました。

そのような中、友人の勧めもあり2017年7月から第59次南極地域観測隊・野外観測支援(FA)隊員に応募、現地で研究者の野外活動をサポートする隊員として採用され活動することになりました。

第59次隊では南極昭和基地周辺で活動、第60次隊では南極のドームふじ基地周辺まで昭和基地から1,000⁺内陸まで雪上車で移動して100万年前のアイスコアを掘削するプロジェクトに参加、61次隊では生物調査チームリーダーとしてベルギー基地をベースに南極の地衣類・バクテリア調査研究者の野外活動をサポートする任務につけてきました。

現在は、国立極地研究所・極地研講師という立ち位置で南極観測隊に参加予定の方の野外訓練など後輩の育成に関わら

せていただいています。

「山を知るー山に学ぶ」常に夢を抱くこと、あきらめない気持ちを持つことを山から教えていただけなければ困難を乗り越えることは出来なかったと思います。また登山を通じ知り合った方々の支えとご縁のおかげで今日まで活動できたこと、家族に感謝しています。

恩師が常日頃言われていた「逆境は順境なり」その言葉を反芻し山あり谷ありの生きざまだったと思います。

略 歴

高村 真司 (たかむら しんじ)

1960年 生

山形県村山市 在住

日本大学山形高等学校 卒

愛知学院大学法学部 卒

環境省自然公園指導員

(公社) 日本山岳ガイド協会会員 資格 山岳ガイドII

スキーガイドII

(公社) 日本山岳会会員

(公社) 日本雪氷学会会員

(特定非営利活動法人) 災害人道医療支援会 (HUMA)

ロジスティクス会員

(独立行政法人) 国立登山研修所講師

日本大学山形高等学校山岳部

愛知学院大学山岳部

第59、60、61次南極地域観測隊 参加